

訛 訓

孫子兵法

1. [計篇](#)
2. [作戦篇](#)
3. [謀攻篇](#)
4. [形篇](#)
5. [勢篇](#)
6. [虚実篇](#)
7. [軍争篇](#)
8. [九变編](#)
9. [行軍篇](#)
10. [地形篇](#)
11. [九地篇](#)
12. [用間篇](#)
13. [火攻篇](#)

計篇

孫子は曰う。兵は国の大事であり、死生の地、存亡の道は、察しなくてはならないのである。だから、これを経るには五事により、これを校べるには計によって、その情を索る。一に曰く道、二に曰く天、三に曰く地、四に曰く将、五に曰く法。道は民に上と意を同じくさせるものであり、ためにこれと死生を与にすべくして、危ぶまない。天は陰陽・寒暑・時制である。地は遠近・険易・広狭・死生である。将は智・信・仁・勇・嚴である。法は曲制・官道・主用である。凡てこの五つは、将であって聞かないということは莫い。これを知る者は勝ち、知らない者は勝たない。そこで、これを校べるには計によって、その情を索る。曰く、主はどちらが有道か、将はどちらが有能か、天地はどちらが得ているか、法令はどちらが行われているか、兵衆はどちらが強いか、士卒はどちらが練れているか、賞罰はどちらが明らかか。吾はこれにより勝負を知るのである。

将が吾の計を聴きいれるなら、これを用いれば必ず勝つ。これを留める。将が吾の計を聴きいれなければ、これを用いれば必ず敗れる。これを去る。計が利として聴きいれられれば、のちにはこれが勢を為して、その外を佐ける。勢は利に因って権を制することである。

兵は詭道である。だから、能にしてそれに不能を示し、用にしてそれに不用を示し、近にしてそれに遠を示す。利なればそれを誘い、乱なればそれを取り、実なればそれに備え、強なればそれを避け、怒なればそれを撓し、卑なればそれを驕らせ、佚なればそれを勞れさせ、親なればそれを離す。その無備を攻め、その不意に出る。これは兵家の勢であり、先に伝えることはできないのである。

それで、まだ戦わないとき廟算して勝つ者は、算を得ることが多かったからだ。まだ戦わないとき廟算して勝たない者は、算を得ることが少なかったからだ。算が多ければ勝ち、算が少なければ勝たない。それを算が無いときに於いては、いうまでもないことだ。吾はこれによってそれを観て、勝負を見いだすのである。

作戦篇

孫子は曰う。凡そ用兵の法は、駆車は千駕・革車は千乗、帶甲は十万で、千里に饋糧すれば、内外の費・賓客の用・膠漆の材・車甲の奉は、日に千金を費やし、その後に十万の師は挙がるのである。その戦いを用なうや久しくすれば兵は鈍り銳は挫け、城を攻めれば力は屈し、久しく師を暴せば国用が不足する。それで兵が鈍り銳が挫け、力が屈し貨が殲きれば、諸侯はその弊に乗じて起ち、智者が有つたとしても、その後を善くすることはできないのである。それで兵は拙速なることを聞いても、巧久なることは賭ないのである。兵を久しくして國を利する者は、有つたことがないのだ。だから尽く用兵の害を知らない者は、尽く用兵の利も知ることはできないのだ。

善く兵を用いる者は、役は再びは籍らず、糧は三たびは載せず、用は国に取り、糧は敵に因り、それで軍の食は足りさせるべきなのだ。国が師にて貧しくなるのは、遠い者に遠く輸ぶによる。遠い者に遠く輸べば百姓は貧しくなる。近くの師にては貴売し、貴売すれば百姓の財は竭き、財が竭きれば兵役に急し、力は中原に殲き、用は家に虚しくなり、百姓の費は、十にその七を去る。公家の費は、破車罷馬・甲冑弓矢・戟盾矛櫓・丘牛大車で、十にその六を去る。だから智將は務めて食は敵による。敵の一鍾を吃るのは、吾が二十鍾に当たり、貢穀一石は、吾が二十石に当たる。

そこで、敵を殺すのは怒で、敵の貨を取るのは利である。だから車戦して車を十乗已上も得れば、その先ず得た者を賞し、そしてその旌旗を更え、車は雜えて乗り、卒は善くして養う。これこそ敵に勝って強さを益すと謂うもの。

だから、兵は勝つことを貴び、久しくすることを貴ばない。ために、兵を知る将は、民の命の司、國家の安危の主なのだ。

謀攻篇

孫子は曰う。凡そ用兵の法は、国を全^{たも}つを上とし、國を破るはこれに次ぐ。軍を全^{たも}つを上とし、軍を破るはこれに次ぐ。旅を全^{たも}つを上とし、旅を破るはこれに次ぐ。卒を全^{たも}つを上とし、卒を破るはこれに次ぐ。伍を全^{たも}つを上とし、伍を破るはこれに次ぐ。だからこそ百戦百勝は、善の善ではないのだ。戦わずして人の兵を屈することが、善の善なのである。

だから上兵は謀を伐ち、その次は交を伐ち、その次は兵を伐ち、その下は城を攻める。攻城の法は、已むを得ないからするのだ。櫓・轍轆を修め、器械を^{そな}えることは、三月して後に成る。距闊はまた三月して後に已る。将がその忿りに勝えずして、これに蟻附し、士卒の三分の一を殺^しなせ、しかも城を抜けないというのは、これは攻城の災いだ。それで善く兵を用いる者は、人の兵を屈するにも戦うのではないのだ。人の城を抜くにも攻めるのではないのだ。人の國を^{やぶ}るにも久しくするのではないのだ。必ず全^{つか}ことによつて天下に争う。ために兵を頓^{しづ}れさせずに利を全てる。これが謀攻の法である。

それで將は國の輔であり、輔が周であれば國は必ず強く、輔に隙があれば國は必ず弱い。そこで君が軍に患う所以は三つある。軍が進むべきでないのを知らないで、これに進めと謂う。軍が退くべきでないのを知らないで、これに退けと謂う。これを軍を^{しば}ると謂う。三軍の事を知らないで、三軍の政を同じくすれば、軍士は惑い、三軍の權を知らないで、三軍の任を同じくすれば、軍士は疑い、三軍が既に惑い且つ疑えば、諸侯の難が至るのである。これを軍を乱し勝を引くと謂う。

ここに勝を知るには五つのことが有る。戦うべきと戦うべきでないと知る者は勝つ。衆寡の用を^{さと}る者は勝つ。上下の欲を同じにする者は勝つ。虞を以て不虞を待つ者は勝つ。将が能であり君が御^{あや}さない者は勝つ。この五つは勝つことを知るの道だ。だから曰く、彼を知り己を知れば百戦して殆^{あや}うからず、彼を知らずしても己を知れば一勝一負、彼を知らず己も知らざれば戦う毎に必ず殆^{あや}うし。

形篇

孫子は曰う。昔の善く戦う者は、先ず勝たせなくしてから、敵が勝たせてくれるのを待つ。勝たせなくすることは己によるが、勝たせてくれるかは敵による。だから善く戦う者も、勝たせなくすることはできるが、敵をして勝たせてくれるなりにはさせられない。それで、勝つことは知るべし、しかし為すべからず、と曰う。勝たせなくするのは守りであり、勝たせてくれるのは攻めである。守れば余りが有り、攻めれば不足する。善く守る者は、九地の下に藏れ、九天の上に動くから、能く自らを保って勝ちを全うするのだ。

勝ちを あらわ 見して衆人の知る所に過ぎないのは、善ではないのだ。戦い勝つて天下が善しと曰うのは、善ではないのだ。それは秋毫を挙げるには多力とはせず、日月を見るには明目とはせず、雷霆を聞くのは聰耳とはしない。古のいわゆる善く戦う者は、勝ち易い者に勝つのであるから、善くする者が戦えば、奇勝は無く、智名は無く、勇功は無い。だからその戦いは勝つて貳たがわないのである。貳わないので、その勝ちを くだ措す所、已に敗れた者に勝つのである。それで善く戦う者は、不敗の地に立って、敵が敗れるときを失わないのだ。このため勝つ兵は先ず勝つて後に戦いを求め、敗ける兵は先ず戦つて後に勝ちを求める。

善くする者は、道を修めて法を保ち、それで能く勝敗の政を為す。

兵法は、一に曰く度、二に曰く量、三に曰く数、四に曰く称、五に曰く勝。地は度を生じ、度は量を生じ、量は数を生じ、数は称を生じ、称は勝を生じる。それで勝つ兵は鎰で銖を称るが若く、敗ける兵は銖で鎰を称るが若し。

勝者が民を戦わせるとき、積水を千仞の谿に決するが若くさせる者は、形である。

勢篇

孫子は曰う。凡そ衆を治めること寡を治めるが如くさせるのは、分数がこれだ。衆を鬪わせること寡を鬪わせるが如くさせるのは、形名がこれだ。三軍の衆が、必ず敵を受けて敗けは無くさせるのは、奇生がこれだ。兵が加わる所、碁を卵に投じるが如くさせるのは、虚実がこれである。

凡そ戦いは、正を以て合い、奇を以て勝つ。それで善く奇を出す者は、窮まり無きこと天地の如く、竭きざること河海の如し。終わって復た始まるのは、四時がこれだ。死して更に生まれるのは、日月がこれだ。声は五つに過ぎないが、五声の変は、聴ききることはできない。色は五つに過ぎないが、五色の変は、観きることはできない。味は五つに過ぎないが、五味の変は、嘗めきることはできない。戦いの勢は、奇正に過ぎないが、奇正の変は、窮めきることはできないのである。奇正が還って生じあうことは、環に端が無いことの如し。だれがこれを窮められようか。

激水が疾くして石をも漂わせるものは、勢である。鷺鳥が撃って毀折に至らせるものは、節である。このために善く戦う者は、その勢は険、その節は短にして、勢は弩を張るが如く、節は機を発するが如し。

乱は治から生じ、怯は勇から生じ、弱は彊から生じる。治乱は数であり、勇怯は勢であり、彊弱は形である。

それで善く敵を動かす者は、これを 形 あらわせば敵は必ずこれに従い、これを 予えれば敵は必ずこれを取り、利にてこれを動かし、詐にてこれを待つ。

なれば善く戦う者は、これを勢に求めて人に責めない。それで能く人を擇んで勢に任せる。勢に任せる者が、その人を戦わせるときは、木石を転がすが如し。木石の性は、安ければ静まり、危うければ動き、方なれば止まり、円なれば行く。だから善く人を戦わせるの勢いを、円石を千仞の山に転がすが如くさせるのは、勢である。

虚実篇

孫子は曰う。凡そ先に戦地に處て敵を待つ者は佚く、後れて戦地に處て戦いに趨る者は勞れる。それで善く戦う者は、人を致して人に致されない。能く敵をして自ら至らせるのはこれに利するからで、能く敵をして至るを得なくさせるのは、これを害するからだ。それで敵が佚ければ能くこれを勞れさせ、飽ちていれば能くこれを饑えさせるには、必ず趨く所へ出る。

千里を行つて畏れないのは、無人の地を行くのだ。攻めて必ず取るのは、その守らない所を取るのだ。守つて必ず固くするには、その攻めない所を守るのだ。だから善く攻める者には、敵はその守る所を知れない。善く守る者には、敵はその攻める所を知れない。微なるかな微なるかな、形は無に至る。神なるかな神なるかな、声は無に至る。それで能く敵の命を司る。

進むとき禦げなくさせるのは、その虚を衝くからで、退くとき追えなくさせるのは、速やかにして及べなくするからだ。そこで 我こちらが戦おうとすれば、敵が壘を高く溝を深くするとしても、戦わざるを得なくさせるのは、その必ず救う所を攻めるからだ。我が戦おうとしなければ、地に画してこれを守れば、敵が我と戦うを得ないのは、その之く所に乖くからだ。

そこで善く將ひきいる者は、人に 形あらわさせて我は形さず、さすれば我は専あつまって敵は分かれる。我は専あつまつて一となり、敵は分かれて十となる。ここで十を以てその一を攻めるのだ。さすれば我は衆で敵は寡、能く衆を以て寡を擊てば、吾わたしと与ともに戦う者は約あつまるのである。吾が与に戦う地は知られず、知られなければ、敵は備える所が多く、敵の備える所が多ければ、吾と戦う者は寡になるのである。そこで前に備えれば後が寡になり、後に備えれば前が寡になり、左に備えれば右が寡になり、右に備えれば左が寡になり、備えない所が無ければ、寡にならない所も無い。寡になるのは人に備えるからで、衆になるのは人をして己に備えさせるからだ。だから戦いの地を知り、戦いの日を知れば、千里にしても会戦せよ。戦いの地を知らず、戦いの日を知らなければ、左は右を救うことができず、右は左を救うことができず、前は後を救うことができず、後は前を救うことができない。それをまして遠くとも數十里、近くは數里なれば。吾がこれを度はかるに、越人の兵は多いといつても、またどうして勝ちに益しようか。これこそ、勝ちは 擅ほしいまにできる

のだと曰うもの。敵が衆だとしても、闘えなくしてしまうのだ。

そしてこれを策って得失の計を知り、これを迹づけて動静の理を知り、これを形^{あらわ}させて死生の地を知り、これに角れて有余不足の処を知る。

だから兵を形すことの極みは、無形に至る。無形であれば、深間も窺うことができず、智者も謀ることができない。形に因って勝ちを措^{くだ}すも、衆が知ることはできない。人が皆な我が勝ちの形を知つても、吾が勝ちを制する所以の形を知ることは莫い。そしてその戦勝は復^{くりかえ}さずして、形に窮まり無く応じる。

それ兵の形は水に象る。水の行くことは、高みを避けて下に趨^{はし}る。兵が勝つことは、実を避けて虚を擊つ。水は地に因つて行くを制し、兵は敵に因つて勝ちを制する。だから兵に常の勢は無く、常の形も無い。能く敵に因り変化して勝ちを取る者は、これを神と謂う。それで五行に常勝は無く、四時に常位は無く、日には短長が有り、月には死生が有る。

軍争篇

孫子は曰う。凡そ用兵の法は、將が君より命を受け、軍を合わせ衆を集め、和を交えて^{とど}舍まるに、軍争より難しいものは莫い。軍争の難しさは、迂を直とし、患を利とすること。だからその途を迂げ、そして利にてこれを誘う。人より後に発ち、人より先に至る。これぞ迂直の計を知る者である。軍争は利、軍争は危、軍を挙げて利を争えば及ばず、軍を委いて利を争えば輜重が捐てられる。このため、甲を巻いて趨り、日夜處まらず、倍の道を兼ねて行き、百里にして利を争えば、三將軍を^{とりこ}擒^{つよ}にされる。^{はし}勁^{とど}い者は先だち、疲れた者は後れ、その法は十に一が至る。五十里にして利を争えば、上將軍を^{くつかえ}躡^{くつがえ}され、その法は半ばが至る。三十里にして利を争えば、三分の二が至る。

それで兵は詐^{はや}にて立ち、利にて動き、分合にて変をなすものである。だからその疾^{しづ}きことは風の如く、その徐^{しづ}かなることは林の如く、侵掠すること火の如く、動かざること山の如く、知り難きこと陰の如く、動くことは雷震の如くして、嚮^むきを指すには衆を分け、地を廓^{ひろ}げるには利を分け、權を懸けてから動く。迂直の計を先に知る者は勝つ。これぞ軍争の法である。

軍政に曰う、言っても聞こえない、だから鼓金をつくる、視しても見えない、だから旌旗をつくる、と。このため昼の戦いには旌旗が多く、夜の戦いには金鼓が多い。さても金鼓・旌旗は人の耳目を一つにする所以である。人が既に專一であれば、勇む者も独りでは進むを得ず、怯む者も独りでは退くを得ない。紛紛紜紜、鬪乱して乱れもせず、渾渾沌沌、形円くして敗れもしない。これぞ用衆の法である。三軍には氣を奪い、將軍には心を奪える。このため、朝の氣は銳、昼の氣は惰、暮れの氣は帰にして、善く兵を用いる者は、その銳氣を避け、その惰氣を撃つ。これぞ氣を治める者である。治にて亂を待ち、靜にて譁を待つ。これぞ心を治める者である。近にて遠を待ち、佚にて勞を待ち、飽にて飢を待つ。これぞ力を治める者である。正正の旗を邀えること無く、堂堂の陳を擊つこと勿し。これぞ變を治める者である。

九変編

孫子は曰う。凡そ用兵の法は、高陵には向かうな、背丘には逆^{むか}えるな、絶地には留まるな、佯北には従うな、銳卒は攻めるな、餉兵には食いつくな、帰師は遏^{とど}めるな、囲師には必ず闕^かき、窮寇には迫るな。これぞ用兵の法である。

塗^{みち}には由らない所が有り、軍には撃たない所が有り、城には攻めない所が有り、地には争わない所が有り、君命にも受けない所が有る。

それで将であつて九変の利に通じる者は、用兵の法を知っているものである。将であつて九変の利に通じない者は、地形を知っていたとしても、地の利を得ることはできないものである。兵を治めても九変の術を知らない者は、五利を知っていたとしても、人の用を得ることはできないものである。

このために、智者の慮は必ず利害を雜^{まじ}える。利を雜えるから務めは信^{まこと}になるのだ。害を雜えるから悪いは解けるのだ。

これだから、諸侯を屈するには害により、諸侯を役するには業により、諸侯を趨らせるには利による。

それで用兵の法は、その来ないことを恃みとるので無く、吾^{こちら}の能くこれを待つこと有るを恃みとし、その攻めないことを恃みとるので無く、吾の攻めさせない所が有ることを恃みとするのだ。

そこで将には五危が有る。必死は殺され、必生は虜にされ、忿速は侮られ、廉潔は辱められ、愛民は煩わされる。凡そこの五つは、将の過ちで、用兵の災いだ。軍を覆し将を殺すのは、必ず五危による。察しなくてはならないのである。

行軍篇

孫子は曰う。凡そ軍を処き敵を相ることについて。山を絶えるには谷に依り、生を視て高みにい處き、戦いは降りてし登ることは無い。これぞ山に処るの軍である。

水を絶えては必ず水から遠ざかり、客が水を絶えてから来たれば、水の内にてこれを迎えるな。半ばまで済らせてからこれを擊つのが利というもの。戦おうとするならば、水に附いて客を迎えるな。上に雨水あり、水流が至れば、渉るのを止め、その定まるときを待つ。生を視て高みにより、水流を迎えない。これぞ水の上に処るの軍である。

斥沢を絶つには、ただ亟かに去り留まるな。もし斥沢の中にて軍を交えれば、必ず水草に依つて衆樹を背にする。これぞ斥沢に処るの軍である。

平陸は易に処り、高みを右と背にし、死を前に生を後にする。これぞ平陸に処るの軍である。

凡そ四軍の利は、黃帝が四帝に勝った所以である。

凡そ軍は高みを好んで下を悪む。陽を貴んで陰を賤しみ、生を養って実に処る。これを必勝と謂い、軍に百疾が無い。丘陵・堤防は、必ず陽に処てこれを右・背にする。これぞ兵の利、地の助けである。

凡そ地に絶澗・天井・天牢・天羅・天陥・天隙が有れば、必ず亟かにこれを去り、近づいてはいけない。吾はこれに遠ざかり、敵にはこれに近づかせ、吾はこれを迎え、敵にはこれを背にさせる。

軍の旁に険阻・潢井・葭葦・山林・蘚苔が有るときは、必ず謹んでこれを覆索する。これぞ伏姦の処る所だ。

敵の近くして静かなる者は、その險を持みとしているのだ。敵の遠くして戦いを挑み、人が進むのを欲する者は、その居る所が易にして利あるからだ。衆樹の動くのは來るのだ。衆草の障いが多いのは、疑わせるのだ。鳥が起つのは、伏せているのだ。獸が駭くのは、覆れているのだ。塵が高くして鋭いのは、車が來るのだ。卑くして広がるのは、徒が來るのだ。散って条達する

のは樵採しているのだ。少なくして往来するのは、営軍しているのだ。

ことば
辞では卑くして備えを益す者は、進むのだ。辞では彊くして進駆するかの者は、退くのだ。

軽車が先づ出て側に居るものは、陳ねるのだ。約が無くして和を請う者は、謀るのだ。奔走して兵を陳ねる者は、期するのだ。半ば進み半ば退く者は、誘うのだ。

杖して立つ者は、飢えるのだ。汲んで先づ飲む者は、渴くのだ。利を見ても進まない者は、勞れているのだ。鳥が集まる者は、虚しいのだ。夜の呼ぶ者は、恐れるのだ。軍の擾れる者は、将が重みないのだ。旌旗の動く者は、乱れるのだ。吏の怒る者は、倦んでいるのだ。馬を殺して肉食する者は、軍に糧が無いのだ。甌を懸け、その舎に返らない者は、窮寇なのだ。諄諄翕翕として、徐ろに人と言ふ者は、衆を失っているのだ。数々賞する者は、奢しんでいるのだ。数々罰する者は、困っているのだ。先に暴くして後でその衆を畏れる者は、不精の至りなのだ。来て委謝する者は、休息を欲しているのだ。兵が怒って迎いあい、久しくして合わせず、また解き去らるのは、必ず謹んでこれを察しろ。

兵は多いことを益とするのではないのだ。ただ武進すること無く、力を併せ敵を料れば、それにて人を取るに足りるもの。さてもただ慮ることが無くて敵を易る者は、必ず人に擒にされる。

卒が未だ親附しないのにこれを罰すれば服さず、服さなければ用い難いものだ。卒が已に親附しているのに罰が行われなければ用いることはできないのだ。だからこれを合わせるには文により、これを斉えるには武による。これぞ必取というもの。令が素より行われ、よってその民に教えれば民は服する。令が素より行われず、よってその民に教えれば民は服さない。令が素より信なる者は、衆と相い得るのである。

地形篇

孫子は曰う。地形には、通るもののが有り、^{さまたげ}挂るものが有り、^{わか}支れるものが有り、^{せま}隘いものが有り、險しいものが有り、遠いものが有る。

我こちらはそこを往け、彼あちらもそこを来られるものを、通ると曰う。通る形には、先に高陽に居て、糧道を利して戦えば利あり。そこを往けても、そこを返るには難しいものを、^{さまたげ}挂ると曰う。挂る形には、敵が備え無ければ出てこれに勝つ。敵がもし備え有れば勝たず、そこを返るは難しく不利。我は出て不利、彼も出て不利なるを、支れると曰う。支れる形には、敵が我を利するとしても、我からは出るな。引いてこれを去り、敵を半ばまで出させてこれを擊てば利あり。^{せま}隘い形には、我は先にこれに居て、必ずこれを盈たして敵を待つ。もし敵が先にこれに居て、盈ちていれば従まず、盈ちていなければこれに従む。險しい形には、我は先にこれに居て、必ず高陽に居て敵を待つ。もし敵が先にこれに居れば、引いてこれを去り従むな。遠い形には、勢いが均しければそこで戦いを挑み難く、戦っては不利。凡そこの六つは、地の道であり、将の至任にして、察しなくてはならないのである。

そこで、兵には、走る者が有り、弛む者が有り、陥る者が有り、崩れる者が有り、乱れる者が有り、北げる者が有る。凡そこの六つは、天の災いではなく、将の過ちである。

さても勢いが均しいときに、一を以て十を擊てば走る。卒が強く吏が弱ければ弛む。吏が強く卒が弱ければ陥る。大吏が怒って服さず、敵に遇えば懲んで自ら戦い、将がその能を知らなければ崩れる。将が弱く嚴かでなく、教道が明らかでなく、吏卒は常が無く、兵を陳ねること縦横なれば乱れる。将が敵を料ることができず、少なくして衆いものに合い、弱くして強いものを撃ち、兵には選鋒が無ければ北げる。凡そこの六つは、敗けの道だ。将の至任にして、察しなくてはならないのである。

そも地形は兵の助けである。敵を料って勝を制し、險夷・遠近を計るのは、上将の道だ。これを知って戦いを用なう者は必ず勝ち、これを知らずして戦いを用なう者は必ず敗れる。だから戦道が必勝なれば、主は戦うなと曰っても、必ず戦ってよいのだ。戦道が不勝なれば、主は必ず戦

えと曰っても、戦わなくてよいのだ。そこで進んでも名を求めず、退いても罪を避けず、ただ民をこそ保ち、そして利が主に合うは、國の宝である。

卒を観ること 豊兒みどりごの如くするから、これと深い谿へ赴くこともできる。卒を観ること愛子の如くするから、これと俱に死ぬこともできる。厚くしても使うことができず、愛しても令することができます、乱れても治めることができなければ、譬えるに 騒子なまいきの若くなり、用いることはできないのだ。

吾が卒の撃てることを知つても、しかし敵の撃たせないことを知らなければ、勝の半ばである。敵を撃てることを知つても、しかし吾が卒の撃てないことを知らなければ、勝の半ばである。敵を撃てることを知り、吾が卒の撃てることを知つても、しかし地形のよつて戦うべきでないことを知らなければ、勝の半ばである。それで兵を知る者は、動いて迷わず、擧げて頓つかれない。だから曰う、彼を知り己を知れば、勝ちは殆うあやくなくなる。地を知り天を知れば、勝ちは全うできるだろう。

九地篇

孫子は曰う。用兵の法には、散地が有り、輕地が有り、争地が有り、交地が有り、衢地が有り、重地が有り、圮地が有り、囲地が有り、死地が有る。

諸侯が自らその地に戰うところを、散地とする。人の地に入るもまだ深くないところを、輕地とする。こちら 我あちら が得れば利、あちら 彼こちら が得ても利あるところを、争地とする。我もそこを往け、彼もそこを来られるところを、交地とする。諸侯の地が四属し、先に至れば天下の衆を得るところを、衢地とする。人の地に入ること深くして、城邑を背にすること多いところを、重地とする。山林・險阻・沮沢を行き、凡そ道を行き難いところを、圮地とする。由よって入る所は隘せまく、従たもつて帰る所は迂まがり、彼は寡にして吾が衆を擊てるところを、囲地とする。疾戦すれば存よち、疾戦しなければ亡たもぶところを、死地とする。

このため、散地では戦わず、輕地では止まらず、争地では攻めず、交地では絶たず、衢地では合交し、重地では掠め、圮地では行き、囲地では謀り、死地では戦う。

いわゆる古の善く兵を用いる者は、能く敵人を前後が及びあわず、衆寡が恃みあわず、貴賤が救いあわず、上下が扶たすけあわず、卒が離れて集まらず、兵が合ととのつても齊せいわなくさせる。利に合ってこそ動き、利に合わなければ止どまる。

敢えて問う、敵が衆がり整むらつていま來ようとする。これをどう待つか。曰く、先にその愛する所を奪えば聽したがうであろう。兵の情は速さを主とする。人が及ばないので乗じて、不虞の道に由り、その戒めない所を攻めるのだ。

凡そ客の道は、深く入れば専ほしいまにして、主人は克つかたず、饒野を掠めて三軍は食うに足り、謹み養ほって勞つかれさせず、氣を併せ力を積み、兵を運び謀を計り、測られなくする。これを往る所無しに投げいれれば、死んでも北にげない。死はどこに得ようが、士人は力を尽くす。

兵士は甚だしく陥れば懼おそれず、往く所が無ければ固まり、深く入れば拘つながり、已やむを得なければ鬪う。このため、その兵は修めなくても戒いみ、求めなくても得、約さなくても親しみ、令しなくても信あり。うらな 祥祥いを禁じて疑きいを去れば、死に至るまで之る所は無い。吾が士に余財は無く

ても、貨を悪むのではない。余命は無くとも、寿を悪むのではない。

令が發せられる日には、士卒の坐る者は 涙なみだ が襟ぬ を霑あらし、偃臥する者は涙が頤あご に交わる。これを往る所無しに投げいれれば、諸・剣の勇になる。

それで善く兵を用いる者は、譬えば率然の如く、率然とは常山の蛇であるが、その首を擊てば尾が至り、その尾を擊てば首が至り、その中を擊てば首尾が俱に至る。敢えて問う、兵は率善の如くさせるべきか。曰く、そうだ。さても異人は越人とは惡みあうものだが、その舟を同じくして済り風に遭うときには、その救けあうことは、左右の手の如し。これだから馬を方わべ輪わを埋めても、まだ恃みとするには足りないので。勇をととの 齊そなへ え一つにするのは、政の道である。剛柔みな得るのは、地の理である。それで善く兵を用いる者が、手を携えるが若く一つにならせるのは、人をして已むを得なくさせるのである。

將軍の事は、静かにして幽ふかく、正しくして治まる。能く士卒の耳目を愚にし、これに知られない。その事を易え、その謀を革かめ、人に識あらた されない。その居を易え、その途を迂まげ、人に慮さと させない。帥いてこれと期すれば、高ひきくに登って梯はしご を去るが如く、深く諸侯の地に入つて機を発すれば、群羊を驅るが若し。驅られて往き、驅られて来るも、之く所を知らない。三軍の衆を集め、これを陥に投じる、これぞ將軍の事であり、九地の変、屈伸の利、人情の理は、察しなくてはならないのである。

それで、諸侯の謀を知らなければ、預あらかじ め交わることはできず、山林・険阻・阻沢の形を知らなければ、行軍することはできず、鄉導を用いなければ、地の利を得ることはできない。この三つは、一つも知らなければ、王霸の兵ではないのだ。

さても王霸の兵なるものは、大国を伐てばその衆は聚まることを得ず、威が敵に加わればその交わりは合うことを得ない。これだから、天下の交を争わず、天下の権を養わなくても、己の私わたくし を信ばし、威は敵に加わる。ためにその城を抜き、その国を墮もち とすことができる。

無法の賞を施し、無政の令を懸け、三軍の衆を犯ごと いることは、一人を使うが若し。これを犯ことば するには事により、言ことば にて告げるな。これを犯ことば いるには利により、害にて告げるな。これを亡地に投げいれてこそ、その後に存し、死地に陥れてこそ、その後に生あり。そも衆は害に陥つてこそ、その後に能く勝敗を為す。

だから兵を為すの事は、敵の意を順詳するに在る。并敵一向、千里に將を殺す、これぞ事を巧みにすると謂うもの。

このため、政を擧げる日には、関を夷とざ し符ふだ を折り、その使いを通わせず、廊廟の上にて厲はげ み、よつてその事を誅もと める。敵人が開闔するとき、必ず亟すみや かにこれに入り、その愛する所を微ひそ かに先にすると期し、践墨隨敵、よつて戦い事を決する。このために始めは処女の如く、敵人が戸を開き、後には脱兎の如くし、敵を拒ふせ ぐに及ばせない。

用間篇

孫子は曰う。凡そ十万の師を興し、千里に兵を出せば、百姓の費・公家の奉は、日に千金を費やし、内外が騒動し、^{なりわい}と事^{こと}を操り得なくなる者は、七十万家。守りあうこと数年にして、一日に勝ちを争う。それを爵禄百金を愛しみ、敵の情を知ろうとしない者は、不仁の至りで、人の将ではなく、主の佐^{たす}けではなく、勝ちの主ではないのだ。だから明主賢将が、動いて人に勝ち、成功して衆に出る所以は、先知である。先知というものは、鬼神から取るものではなく、事^{こと}に象^{ほか}ること^{かたど}できることはできず、度^{はかり}に驗^{あらわ}そうとしてもいけない。必ず人によって取り、知るものなのだ。

そこで、間を用いることには五つが有る。郷間が有り、内間が有り、反間が有り、死間が有り、生間が有る。五つの間を俱に起こし、その道は知られることが莫い、これぞ神紀と謂うもの、人君の宝である。

郷間は、その郷の人に因ってこれを用いる。内間は、その官人に因ってこれを用いる。反間は、その敵の間に因ってこれを用いる。死間は、誑事を外に為し、吾が間にこれを知らせて、敵に伝えさせる。生間は、^{かえ}反り報じるのである。

それで、三軍の親しさは間より親しいものは莫く、賞は間より厚くするものは莫く、事は間より密かにするものは莫い。聖でなければ間を用いることはできず、仁でなければ間を使うことはできず、微妙でなければ間の実を得ることはできない。微なるかな微なるかな、間を用いない所は無いというもの。間の事がまだ発しないのに聞こえることあれば、間と告げた者とは皆、死なせる。

凡そ撃とうとする軍、攻めようとする城、殺そうとする人^{あいて}は、必ず先にその守将・左右・謁者・門者・舎人の姓名を知り、吾が間に令して必ずこれを索め知らせる。

敵の間が来て我^{こちら}を問する者は、因ってこれに利し、導いてこれを舎まらせる。そして反間は得て用いることができるのだ。これに因ってそれを知り、そして郷間・内間は得て使うことができるのだ。これに因ってそれを知り、そして死間は誑事を為し敵に告げることができる。これに因ってそれを知り、そして生間は期した如くにさせることができる。五つの間の事は、

主が必ずそれを知る。それを知ることは必ず反間に在る。だから反間には厚くしなければいけないのである。

殷が興るとき、伊摯が夏に在り、周が興るとき、呂牙が殷に在った。だから明主賢将だけが、能く上智を間者にたて、必ず大功を為す。これが兵の要、三軍が恃みとして動く所である。

火攻篇

孫子は曰う。凡そ火攻には五つ有る。一に曰く火人、二に曰く火積、三に曰く火轔、四に曰く火庫、五に曰く火隊。火を行うには因が有り、因は必ず素より具える。^{そな}火を発するには時が有り、火を起こすには日が有る。時とは天が燥くときである。日とは月が箕・壁・翼・軫に在るときであり、凡そこの四宿は風が起る日である。

火が内から発すれば、早く外からこれに応じる。火が発しその兵が静かならば、待って攻めるな。その火の^{わざわ}殃^{すす}いを極め、従むべきならこれに従み、従むべきでなければ止める。火を外から発すべきなら、内からを待つことは無く、時を以てこれに発する。火を^{かざかみ}上風^やから発するときは、下風^{かざしも}に攻めることは無い。昼の風が久しいときは、夜の風には止める。凡そ軍には五火の変が有ることを必ず知り、^{すべ}数にてこれを守る。

そして火にて攻めを佐けるものは明^{たす}、水にて攻めを佐けるものは強。水によって絶つことはできるが、奪うことはできない。

さて戦い勝ち攻め取って、なおその功を修めなければ凶であり、命けて費留と曰う。だから明主はこれを慮り、良将はこれを修める。利でなければ動かず、得ることなれば用いず、危ういのでなければ戦わない。主は怒りにて師を興してはならず、將は懼みにて戦いを致してはならない。利に合えば動き、利に合わなければ止めろ。怒りは復た喜び、懼みは復た悦れることがあるが、亡びた国が復た存り、死んだ者が復た生きることはない。だから明主はこれを慎み、良将はこれを警む。これぞ國を安んじ軍を全つ道といふものなのである。